Ⅰ　21世紀の社会と京都

1　21世紀の社会　～豊かな＜ハートウェア＞を～

今日の社会は急激に変化しています。その中で，今後の長期的な社会像を明確に描くことは，不確かな要素も多く，難しい作業ですが，私たちとその子供たちが生きる２１世紀には，引き続き急速に進展する技術革新を基礎としながら，国際化（A）・情報化（B）・高齢化（C），さらに，余暇時間の増大（D）や高学歴化に伴う価値観の多様化などの変化が，一層スピードを早めながら展開していくことでしょう。

そのような変化の中で，幸せな生活を築いていくためには，どのような変化の中でもたくましく生き抜くことができる能力，つまり，変化に伴って生じる新しい課題に立ち向かい，解決の方策を産み出す能力を一人一人身につけることが重要となります。

また，かつての高度経済成長の時代から社会・経済が急速に成熟化へと向かう中で，「物豊かにして，心貧しい」という現象が，大人社会であると子供社会であるとを問わず大きな社会的問題として取り上げられてきました。心豊かな，生きがいのある生き生きとした生活をどのように実現していく

のかという問題は，今後，より一層私たち一人一人にとって身近で，切実な問題となります。

すべての人が幸せに生活していけるようにするには，一人一人の人間が尊重される，差別のない社会を実現することが必要であり，そのためには，私たち一人一人が，同和問題をはじめとする人権問題について自分に関わりのある問題として考え，自分の生き方に結び付けていくことのできる心を育てることが求められています。

一層の技術革新の時代である21世紀においてこそ，人としてのより根源的な問題，つまり，すべての人が幸せに生きるために「生きがいを持ってどう生きるか」が問いなおされてくるのではないでしょうか。

今日，時代は，物的な条件の整備を目指す(6)ハードウェア充実の時代から，そうしたハードウェアを人々の生活のためにより良く活用していくことを目指す(7)ソフトウェア充実の時代へ向かいつつあると言われています。このような生きる手段としてのハードウェア，ソフトウェアを充実し，その活用を図るための知識や情報を身につけることも，もちろん重要です。

しかし，これからは，どのような問題にも立ち向うことが

できる能力をもとに，このような生きるための手段を利用して，「人としてどう生きるか，何のために生きるか」ということについて，私たち一人一人が自ら納得するものを見つけ出し，生きがいを持って生活していくこと，すなわち，人間の生き方そのものが一層重要になるのではないでしょうか。

人間の生き方そのものは，一人一人の「心」（Ｈｅａｒｔ）に関わることですので，生きるための手段について，ハードウェア，ソフトウェアということが言われることに対して，ここでは＜ハートウェア＞と呼ぶこととしたいと思います。

今後21世紀に向けて，生きる手段としてのハードウェアやソフトウェアを充実することはもちろん，人間の生き方そのものである＜ハートウェア＞を豊かにすることが重要であり，そのためにも生涯学習・生涯教育の充実が求められてくると考えられます。

2　21世紀の京都

21世紀の京都は，国際化，情報化，高齢化あるいは価値観の多様化といった状況が，急速に進展していくと思われますが，今日の京都を取り巻く状況をみるとき，それらの変化をテコにして自然に発展していくというようなバラ色の将来を

安易に描くことはできません。

京都は，「ややもすれば，その歴史の重みのなかに埋没し，過去の栄光が失われようとしているにもかかわらず，いたずらに現状に甘んじ，新しく創生しようとする意思とエネルギーを滞留させ，進みゆく方向さえ見失おうとしている。」（平安建都1,200年記念事業基本理念－抜粋－）という厳しい指摘にも見られるように，単に経済・産業面（E）だけでなく文化的側面においても，その停滞が危惧されているのが実情であり，21世紀への転換点に立っていると言うことができます。

今日，京都のこうした状況を克服し，確かな発展を目指して様々な計画やプロジェクトが既に立案され，また，実行に移されつつありますが，今後，市民が生活を営む都市・京都の新しい創生に向けて，教育・文化的側面の充実が一層重要な課題となると予測されます。

都市の発展は，その文化的土壌の深さによると言われます。明治初期の京都の近代化において番組小学校（8）の創設等学校教育の充実が大きな役割を果たしたように，生涯学習・生涯教育の推進は，京都の発展に大きな貢献をすることが可能です。

京都の発展を目指す様々な施策が有機的に結合し，総合的に推進されたとき，京都は，21世紀に向けて，150万市民の

生き生きとした活動が展開される，知的な創造力と豊かな生命力を持った都市として，着実な歩みを続けていくことができるのです。

3　生涯学習・生涯教育と京都

生涯学習は市民一人一人が生涯にわたって自らの学習課題を発見して行う自発的な学習活動であり，生涯教育はその生涯学習を進めるための組織的な条件整備を目指すものです。

生涯学習・生涯教育といっても何も机に向かって勉強したり，講義を聞いたりする狭い意味の学習や教育だけでありません。趣味やレジャー的な要素も含めた幅の広い一人一人にとって楽しい学習活動を目指すものです。

生涯学習や生涯教育の考え方が示されたのは，決して最近のことではありません。生涯教育（life-long integrated education ）の理念がユネスコのポール・ラングランによって約20年前に提唱されて以来，諸外国においては，その具体的な施策化へ向けての取組が行われ，我が国においても教育制度の全体のうえに打ち立てられるべき基本的な理念として位置付けられ（9）（昭和56年中央教育審議会答申等），これまで，様々な取組が進められてきました。また，昭和59年に発足し

(10)
た臨時教育審議会のこれまでの三次にわたる答申においても「生涯学習体系への移行」を大きな柱として，生涯学習・生涯教育の施策化を目標の一つにしています。

本市においても，前述のように市民一人一人が生きがいを持って充実した人生を送るために，また，市民が生活を営む都市としての「京都」の発展のためにも生涯学習・生涯教育の推進が求められていますが，その推進に当たっては，こうした生涯学習・生涯教育の国際的，国内的な流れを注意深く見守りながら，しかも流れに押し流されてしまうことなく，主体的な判断の下に京都の特性を十分に生かしていくことが必要です。